

■ 論文 ■

## フィリピン先住民族タグバヌアコミュニティの内発的発展を 促進させる文化再発見型アクションリサーチ

高 杉 公 人

(関西学院大学人間福祉学部助教)

■ 要 旨 ■ 本研究では、フィリピンの先住民族タグバヌア族コミュニティにおける内発的発展型社会開発の可能性を探る為に、タグバヌア族自身が文化を再発見し、それを強みとしてコミュニティを発展させることを目的とした「文化再発見型アクションリサーチ」を実施した。アクションリサーチとして、長老の歴史を聴いて書き残す「ライフヒストリーリスニング&ライティングトレーニング (LHLWT)」、フィールドワークで発見された植物の活用法を分析して、将来の農業開発を考える「農業再発見フィールドワーク」、長老とのディスカッションを通じて現在の海産物の活用を再考し、経済発展と海洋資源保全を模索する「持続可能な漁業開発再考ワークショップ」、という3つのアクションを複合的に実施し、その結果をトライアンギュレーションして分析・考察した。その結果、伝統的な農法や漁業のプロダクトの活用等、失われつつある文化的価値を先住民族の若者が再発見して後世に残す重要性を確認し、それを将来的なコミュニティ発展に繋げるきっかけとなる動きが見られた。更に外部者である研究者や学生が、文化を強みとしてコミュニティを内発的に発展させるプロジェクトの後方支援を行い、文化を基軸とした内発的発展を促す可能性も示唆された。

■ キーワード ■ 社会開発、内発的発展、文化再発見、アクションリサーチ、  
ライフヒストリー、PLA

### 1. はじめに

フィリピンを含めて世界には「開発」という名の下に自らの居住地を失い生活を脅かされている先住民族は数多く存在する。しかしながら、近代化とグローバリゼーションの潮流の中で、以前のように先住民族が現代社会から隔離した環境で生活するのは今や不可能となっている。その中で先住民族が外発的な開発によって生活を脅かされるのではなく、自身の文化や歴史、ライフスタイルを継承しつつコミュニティの持続的発展を目指す内発的発展型の社会開発を行うようパラダイムをシフトする必要性が生じている。

本研究者はフィリピンにおける先住民族コミュニティの内発的発展型社会開発をトピックとし、その理論構築と実践手法の創造を研究主題として研究を行っている。本研究はその一環として位置づけられる。研究では、フィリピン先住民族の内発的発展を説明する為のフレームとして高田の内

発的発展モデルを採用しており、高田が社会の内発的発展を促す条件としている政治（Politics）、経済（Economy）、文化（Culture）、の相互作用（PEC 構造）を機能させる要因の解明を研究目標としている（高田 1993）。とりわけ本研究においては、フィリピン先住民族の文化にスポットを当てて、外部者との接触により失われつつある伝統文化を再発見し、文化的強みを活かしてコミュニティの内発的発展型社会開発の実践方法を探ることを研究主題とする。

本研究は、研究者本人と協力者である学生7名（学生グループ IPE:Indigenous People's Empowerment の略）がフィリピンの先住民族支援 NGO である PAFID との協働により実施した。しかしながら、研究者や学生自身が先住民族にとって「外部者」であることから、先住民族コミュニティの内発的発展の阻害要因となる可能性を考慮し、本研究者や学生が先住民族コミュニティに溶け込んで内発的発展を促す社会開発の後方支援者となる為に、「文化再発見型アクションリサーチ」を実施した。この手法は、研究者が「調査者」として先住民族コミュニティに入り込むのではなく、口頭で伝承してきた文化（Traditional Knowledge -TK）を文章化して次世代に残すというアクションの協力者となり、先住民族のコミュニティとの参加型ワークショップを通して共に文化を学び合うことで価値を再発見するというものである。

文化再発見型アクションリサーチは、フィリピンのカラミアン諸島に在住する先住民族タグバサアのコミュニティにおいて実施された。このリサーチの結果、伝統的な農法や漁業のプロダクトの活用等、失われつつある文化的価値を先住民族の若者が再発見して後世に残す重要性を確認し、それをコミュニティ発展につなげるきっかけとなる動きが見られた。更に外部者である研究者や学生が、文化を強みとしてコミュニティを内発的に発展させるプロジェクトの後方支援を行い、文化を基軸とした内発的発展を促す可能性も示唆された。本稿において、その実施プロセス及び活動の成果の内容を紹介することとする。

## 2. 研究枠組み

フィリピン先住民族の抱える問題構造は図式の「外発的開発」によって説明される（図 1）。フィリピン先住民族にとって外部者によって行われる開発は、外圧的に作用することが殆どで、彼ら／彼女らの土地は開発と言う名の元に奪われ、漁業や狩猟、農業と言った伝統的生活は外発的開発によって脅かされている。外発的開発は、外部者の社会システムにおける政治（Politics）、経済（Economy）、文化（Culture）の3つの要素が絡み合いながら外圧的にフィリピン先住民族に影響を与えている。フィリピン政府は先住民族への土地所有権の認知に消極的で、経済効果の大きい大規模開発を優先しており（政治的圧力）、大規模開発で利益を得たいビジネスグループは先住民族の土地を認知しないよう政府や先住民族に圧力をかけており（経済的圧力）、先住民族の文化は、グローバルズムにおける欧米的価値観に相反するものとしてフィリピン社会から差別の対象とされ、政治（Politics）、経済（Economy）、文化（Culture）による外圧によりフィリピン先住民族は苦しめられている。

## 外発的開発による3つの圧力

### (1) 政治的圧力

フィリピン政府は、先住民族権利法（Indigenous People's Rights Act-IPRA）の施行に消極的で、先住民族の土地所有権が認められたのは全体の約 18% に過ぎない（2007 年 4 月時点）。IPRA の施行に関わる機関として National Commission of Indigenous People（NCIP）が存在するが、機関の人的及び財政的基盤は非常に弱い。

また、国家戦略として IPRA の優先順位が非常に低く設定され、他の利益を生みやすい資源・エネルギー開発や環境保護開発を保護する制度の施行を優先しているという事実がある。先住民族の土地所有権を認めることは、国家の発展を推進するどころか遅滞させるものとして捉えられている。

### (2) 経済的圧力

フィリピンの先住民族が土地所有権を求めている場所には、美しい小島の海岸沿いが多く存在するが、そのような場所の殆どで国が観光開発を推進している。また山中にも多くの先住民族が生活しているが、その多くの場所において鉱山やエネルギー資源開発が進められている。観光開発やエネルギー開発を推進したいビジネスグループはロビー活動を展開し、そのような地域での IPRA の施行に強く反対し、強制的に先住民族をその地域から排除して開発を進めている。また、農業ビジネスグループが推進するプランテーションや林業などの場所でもビジネスグループと先住民族の衝突が頻繁に起こっている。

### (3) 文化的圧力

先住民族の文化や生活スタイルは、今日のグローバリズムにおける西欧的価値観に相反するものとして捉えられている。国は1980年代には先住民族に対し「同化政策」を進め、先住民族に対して新しい価値や文化を取り入れるよう推進してきた。それを受け入れた者はフィリピンの一般国民と同化していったが、長い歴史において培ってきた先住民族としての価値や文化を守り続けることを決めた部族は現在まで存在し続けている。現在では NCIP などが先住民族の文化保全活動を行っているが、未だに先住民族に対する差別は社会に根強く残っている。

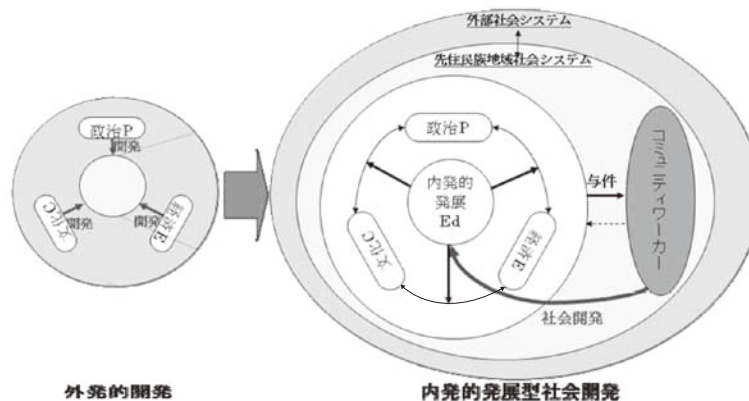


図1 高田モデルの採用による内発的発展型社会開発 概念図

このような外発的開発の問題を踏まえ、先住民族自身が自分達の価値に基づき内発的に発展するための手段として社会開発を実践するのが本研究の課題であり目標である。それを本研究活動において説明する為の論理モデルとして高田の内発的発展モデルを採用する。高田は、社会の下位概念（サブシステム）として、政治（Politics）、経済（Economy）、文化（Culture）が相互に関係を持ちながら存在している（PEC 構造）としている。そして高田は、「PEC 構造にその内側から、あるいは根底から刺激し、その相互関係のあり方を変えていく」現象こそが内発的発展であり、PEC 構造に働きかける方法が社会開発であると設定している。（高田 1993）

この高田モデルをフィリピンの先住民族コミュニティにおける論理モデルとして採用し、改良した概念図が「図 1」である。フィリピンの先住民族コミュニティは外部者の開発による政治的、経済的、文化的圧力が非常に強い環境下に置かれており、その状況で自己の価値や文化、そして自らのイニシアチブに従って社会開発を実施してコミュニティを発展するという目標に臨んでいる。

本研究においては、高田モデルの論理枠組みに従って、フィリピン先住民族コミュニティの内発的発展型社会開発の可能性を検証する手始めとして「文化（Culture）的要因」に着目し、フィリピンにおける先住民族の若者が、長老（Elders）との関わりを通して伝統文化を再発見し、文化的強みを活かしてコミュニティの内発的発展のきっかけとなるアクションを起こす事を研究目的とする。更に、文化的要因が PEC 構造における他の 2 つのサブシステムとどのように相互作用を発生させ、先住民族コミュニティを内発的発展に導くのか可能性を探る事とする。

### 3. 研究方法「文化再発見型アクションリサーチ」の内容

有名な西アフリカの民族学者 Amadou Hampate Ba は、アフリカ先住民族の文化が失われている様子を “In Africa, when an elder dies, a library is burned down.”（老人が亡くなる事は、図書館が消失するようなものだ）と表現している（UN HABITAT 2011）。この表現はフィリピンの先住民族コミュニティの現状にも当てはまる。アフリカの先住民族同様、フィリピンの先住民族も「口頭文化」による伝承が行われてきたが、近年は先住民族の若者が近代的な教育を受けるにつれて、祖先に関する物語や生活様式の文化伝承を受ける機会が失われつつある。このような先住民族が口頭で伝承してきた文化的財産は traditional knowledge（TK）や indigenous knowledge（IK）と呼ばれており、近年、この TK を後世に残す為に文書化し、それを先住民族コミュニティの財産として積極的に開発に活用するという活動が広がってきている（Traditional Knowledge Documentation TKD）。フィリピンの先住民族コミュニティにおいても、TKD 活動は PAFID という現地 NGO により推進されており、少しずつ実践されている。しかしながら、PAFID の TKD 活動は、traditional documenter として任命されたコミュニティの秘書にあたる人物が、長老から文化についての聞き取りを行い記述文を残すという「自主努力」に任されているのが実情で、他に土地問題や外発的開発の圧力等の優先順位の高い課題があるコミュニティではそれほど進んでいない。その為、本研究においてはフィリピンの先住民族コミュニティにおける長老から若者への文化伝承を促進させ、文化的強みを活かしてコミュニティの開発が行えるように TKD 活動を支援する事を目標とする。そして今回の研究結果は、TKD 活動の一環として日本語、英語とともに先住民族の言語によって冊子としてまとめられ、参加した先住

民族コミュニティに配布する予定である。更に、自分たちの言葉で書かれた冊子を持つことをきっかけにして、文化伝承の自主的な促進に繋がるように、冊子の後半部分には書き足しができるよう工夫を行う。このような冊子作りは、外部者である研究者や学生が「調査」という目的の為だけではなく具体的な「支援」として行えるものである。しかし外部者の関わりによって冊子が作られるだけでは意味が薄れてしまうため、より TKD 活動が促進されるエンパワメントの効果を期待した冊子作りを行う事を重要視する。

しかし単に冊子作りを行うだけでは、アクションリサーチとしては不十分である。アクションリサーチは、武田（2011）によると「課題や問題を抱える組織あるいはコミュニティの当事者が研究者と協働して、探究、実践、そしてその評価を継続的に螺旋のように繰り返して問題解決や社会変革、さらには当事者のエンパワメントを目指す調査研究活動」と定義されている。つまり本研究を「文化再発見型アクションリサーチ」と位置付ける以上、先住民族コミュニティの当事者の積極的な参加を促し、エンパワメントが促進され、コミュニティ発展に向けての社会変革に導く必要がある。その為に本研究では、当事者の参加を促進して、研究者や学生が当事者と協働して行う参加型開発において実践される PLA（Participatory Learning and Action）の手法を用いた。PLA とは、「参加による学習行動」の意であり、外部者がファシリテーターに徹しながら、個々の住民が既に持っている知識を引き出せるような舞台を設け、住民全体のリアリティの構築を助け、それを基盤として自分たちのコミュニティの発見を促進させることである。（勝間 2000）。PLA では参加を促進するため様々なツールが使用されるが、本研究では PLA の手法の一種である「時間に関するツール」に着目し、過去と現在を比較するマトリックスを作成して長老の話を若者に伝える方法を用いた。しかしながら、武田（2011）が指摘するように、PLA ツールを使うことで自動的に当事者の参加が行われ、主体的な活動が生まれ、エンパワメントが促進される訳ではない。本研究において使用する PLA ツールは簡単なマトリックスを使用しており、模造紙の上に書き込みが必要とされることで、高い教育を受けていない「書けない」者の参加が制限される可能性が考えられる。その為、事前に参加する先住民族コミュニティのリーダーと綿密な打ち合わせを行い、リーダーがグループの中で先住民族文化の強みである「ストーリーテリング」による口頭伝承を促し、長老の積極的な話を若者が聴いてディスカッションを行う形式をとることとし、それを「記入役」の秘書が模造紙上のマトリックスにまとめるという形式をとることで参加者全員の意見がまとまるよう工夫した。

更に PLA の実施においては、当事者と外部者がパートナーシップを形成してコミュニティ改善の為の情報収集、分析、計画、実行を協働して行う事が求められる（武田 2011）。本研究においても、研究者や学生と当事者（先住民族コミュニティリーダー）と先住民族コミュニティワーカー（先住民族 NGO スタッフであり先住民族コミュニティ出身の外部者と当事者のつなぎ役兼通訳）の 3 者協働でグループファシリテーションを行ってコミュニティの内発的発展を推進することとした（図 2）。先住民族リーダーは、伝統的にグループ内のストーリーテリングの先導者であることから実質的なディスカッションのファシリテーターの役割を果たした。研究者や学生は基本的には先住民族リーダーの後方支援役に回り、グループのストーリーテリングによるディスカッションが促進されるよう協力した。先住民族コミュニティワーカーは、先住民族と研究者・学生の間に入るつなぎ役として通訳支援を行った。



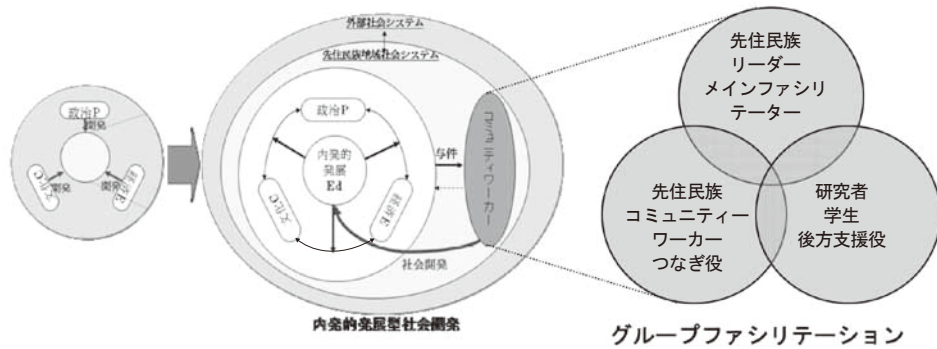


図2 フィリピン先住民コミュニティにおける内発的発展を促進させるグループファシリテーション

#### 4. 研究フィールド 先住民タグバナア 概要

本研究のフィールドとなるのは、フィリピンのカラミアン諸島の島々で暮らす先住民タグバナア (Tagbanwa) のコミュニティである。カラミアン諸島は、フィリピンの中西部に位置するパラワン島の北方に位置する島々の総称であり、多くの島々にタグバナアのコミュニティが散在している。最も多くのタグバナア族が在住するのはコロン島であり、石灰岩の高く険しい岩肌で囲まれており内部には7つの美しい湖が存在する島である。コロン島には、バナワン・ダアン (Banwang Daan) とカブガオ (Cabugao) という二つのタグバナア族のコミュニティが存在する。その2つのコミュニティに加え、ブララカオ (Bulalacao)、トルダ (Torda)、ブエナビスタ (Buenavista)、マラウィグ (Malawig)、タラ (Tara)、ピヨン (Biong)、カラウィット (Calaut) という7つのコミュニティが存在しており、合計9つのコミュニティがタグバナア族コミュニティ全体の運営・管理を行う組織であるサラプンタ (Saragpunta 現地語で saragpun は一緒に集まろうの意) を立ち上げて連携・協働している。

タグバナア族は、伝統的に漁業が生活の中心であり、自分たちの家族が必要なだけの魚、貝、海藻 (海ブドウの一種) を捕っている。タグバナア族の男性は1年のうち10か月程度を海で過ごすと言われており、近年では家族による消費が余った場合のみマーケットに販売するという形をとって、生計を立てると同時に海産資源の保護に努めている。その他、鳥や野生のブタ等の狩猟や野生の野草や果物の採取も伝統的に生活の糧としてきた。農業は陸稲 (upland rice) の耕作を行っている以外はそれ程行われていないが、近年は外部者によってマーケットで売られている野菜を小規模な畑で栽培するコミュニティも現れている。また貨幣を得る手段として最も重要視されているのが、石灰岩の崖や洞穴で採れるツバメの巣である。タグバナア族は石灰岩の崖を攀じ登ってツバメの巣を採取し、それを中国やアジア各国から買い付けに来た業者に売って外貨を獲得しているが、ツバメの巣の採取は個人的に行う事は許されずコミュニティ全体で管理している。

文化人類学者のロバート・フォックスによると、タグバナア族はカラミアン諸島やパラワン諸島で3000年以上暮らしているという (K.Zingapan and D.De Vera 1999)。西暦1225年に中国人によって書かれた歴史書には、タグバナア族が中国人の商人と接触してツバメの巣と様々な中国製品とを物々交換していたという記述があり、外部者との接触の歴史も800年が経過している (G.Zaide and

S.Zaide 1990)。このような歴史資料から、タグバヌア族が外部者を排除することなく受け入れて生活してきた事が読み取れるが、非常に美しい自然を持つカラミアン諸島の土地を買い取って観光客を呼び込もうとする外部の開発者の登場により状況は一変した。1970年代に開発者は、タグバヌア族に無断で地方政府にお金を払い土地や小島を購入する観光開発を行った。当然、タグバヌア族はそれに反対して政府に開発を止めるよう陳情したが、政府は税金を払わないタグバヌア族の土地の所有権を認めなかった。結果、タグバヌア族は今まで生活してきた土地を失い、今まで居住しなかった場所に追いやられる事となった。このような観光開発の動きは1990年代初頭に特に顕著となり、観光開発が進むにつれタグバヌア族は生活の場を失い、コミュニティが拡散して人口が減少していった。

しかしこのような外部からの開発に対して、タグバヌア族は更なる結集を呼び掛けてソーシャルアクションを起こした。開発により土地を失った他の先住民族とも連携し、フィリピン全国的に先住民族の人権保護を訴えた。その甲斐もあって、1997年にフィリピン政府による先住民族権利法 (Indigenous People's Rights Act=IPRA) が施行され、先住民族が古より住んで生活していると政府から認定され、その土地およびその資源の所有権が法的に認められようになった。それに伴い、現地 NGO である PAFID の支援を受けてタグバヌア族は自分達の土地の所有権を証明する手続きを行った。その際に重要視されたのは、タグバヌア族にとって土地と同様に重要な“水と海洋資源”であった。当初は海や湖等に対して先住民族の所有権を認めることは不可能と考えられていたが、PAFID による科学的な証拠証明とタグバヌア族の積極的な政府に対するアドボカシー活動の結果、1999年にコロン島在住するタグバヌア族に対してコロン島全体の土地の所有権と海・湖を含めた海洋資源 (ancestral water) の所有権及び管理権が認められた (図3)。この事実は、フィリピンの先住民族全体に勇気を与えるものとなり、他の先住民族の土地所有権の獲得に向けた全国的なアクションの契機になった。現在はコロン島に加えて、ビヨン島を除く他のタグバヌア族コミュニティの殆どが土地の所有権を認められている。

タグバヌア族は外部者の接触には比較的慣れているが、近年、外部者との接触により様々なトラブルが発生している。カラミアン諸島には、非常に美しい砂浜やサンゴ礁に囲まれた島々が存在しており、ダイビングのメッカとして多くの観光客が訪れて始めている。その為の大規模の観光開発事業が計画・実施されており、経済の中心であるブスアンガ島ではホテルの建設ラッシュが進んで人口が急増している。タグバヌア族の住むコロン島や多くの島々にも多くの観光客が訪れるように

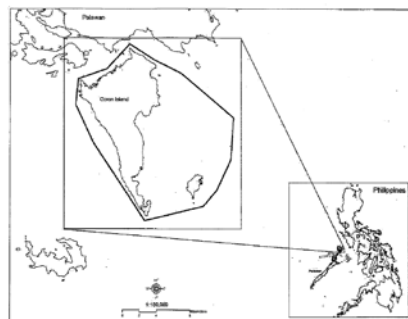


図3 コロン島のタグバヌア族 土地及び海洋資源所有・管理区域 (PAFIDより提供)

なり、タグバヌア族の生活の場ではタグバヌア族の掟に従う必要がある事を理解しない観光客とのトラブルが度々発生している。例えば、コロン島内部には非常に美しく海産資源の豊富な10の湖があり、カヤンガン湖やバラクーダ湖のように外部者にオープンとなっている湖以外は外部者の立ち入りは禁止されているが、観光客が無断で湖に侵入してタグバヌア族に補導されるという事態が発生している。タグバヌア族にとって、湖は彼ら/彼女らの言葉で“パンヤアアン (panyaan) = 神聖な水”と呼ばれている神聖な場所であり、部族民でさえ長老の許可無しに立ち入ることは許されておらず、もしも無断で侵入するとパンララブット (panlalabyut) = 大ダコに襲撃されると信じられているのだが、その意を多くの観光客は理解していない。更に観光客に侵入が許された場所であっても、ゴミのポイ捨て等で水を汚す行為は禁止されているが、それを無視する者も多い。水に対する信仰心・尊敬心はタグバヌア族の精神的支柱であり、それを理解した観光客が増えてくれることが彼ら/彼女らの切実な願いである。更に外部者による違法な漁業により海産資源が減少しており、特にダイナマイトを使用した大量漁獲によって、サンゴ礁が破壊されるという事態が発生している。最近のパラワン州の持続可能な開発課 (PCSD) の調査によると、1989年から1995年の間にタグバヌア族の住む島々での漁獲量はそれ以前の半分になったという結果も報告されており、近年では更に減少している可能性が指摘されている (K.Zingapan and D.De Vera 1999)。タグバヌア族のコミュニティ組織であるサラプンタが中心となり、常に海を巡回して違法な漁業の取り締まりを行っているが、観光開発が進むにつれ違法な漁業者が増加は歯止めがかかっていない。

## 5. 先住民族タグバヌアコミュニティの内発的発展を促進する文化再発見型アクションリサーチ 実践内容

本研究では、2011年2月にタグバヌア族コミュニティの内発的発展を促進させる文化再発見型アクションリサーチを実施した。本研究におけるアクションリサーチはあくまで文化を媒体にした内発的発展を目的としており、長老から若者へ文化を伝達する方法に気づきそれをTKDアクションとして自発的に書き残し、それを強みとして開発を行うきっかけ作りとして行った。更にタグバヌア族全体にこのアクションを拡大する為に、サラプンタに属する9つすべてのタグバヌア族コミュニティに事前に参加呼び掛けを行った。その結果、コロン島のバヌワン・ダアンとカブガオに加え、トルダ、プエナビスタ、タラの3つが加わって合計5つのコミュニティが参加しての実施となった。参加するタグバヌア族コミュニティには、PLAを活用した参加型ワークショップ形式で行う為に、長老から若者への文化伝承をトレーニングとして行えるように、コミュニティリーダー、長老、秘書、若者を最低限含むメンバーで参加してもらった。実施場所はコロン島のカブガオにあるコミュニティホールで、合計参加人数は約100名であった。

本研究において、大きく3つの文化再発見型アクションを行った。1つ目のアクションはタグバヌア族コミュニティの秘書がtraditional documenterとして長老の歴史を「聴く」「書き残す」為のライフヒストリーリスニング & ライティングトレーニング (Life History Listening and Writing Training=LHLWT)、2つ目は農地や原生林でフィールドワークを行い、そこで発見された植物の伝統的活用法を学び、それを用いて将来の農業開発の可能性を探る農業再発見フィールドワーク、そ



して3つ目は、海産物の現在と過去の活用法の違いを長老とのディスカッションを通して学び、将来的な持続可能な漁業開発を考えるきっかけとする持続可能な漁業開発再考ワークショップ、である。この3つのアクションリサーチをPLAの手法を活用して実施し、3つの調査結果はトライアンギュレーションを行って分析・考察されるものとした。

#### 5-1 ライフヒストリーリスニング&ライティングトレーニング (LHLWT)

ライフヒストリーリスニング & ライティングトレーニング (LHLWT) の目的として二つ設定した。1つ目として、タグバヌア族の長老の子ども時代から現在に至るまでのライフヒストリーを研究者がインタビューして聴き取りを行い、それを traditional knowledge (TK) の冊子にまとめる事を目的とした。2つめとして、外部の調査者が聴き取り作業を行う席に traditional documenter であるコミュニティの秘書を同席させて部族の言葉で文章化するトレーニングを目的とした。このアクションをきっかけにして、アクションリサーチが終了した後も、自発的にタグバヌア族の長老一人一人のライフヒストリーを残していく TKD アクションの活性化に繋がる事を目標としたのである。聴き取り方法は、インフォーマルインタビューの形式を取り、ストーリーテリングの文化を持つタグバヌア族の長老ができるだけ話し易いように、「子どもの頃から現在までの文化や生活について自由に話して下さい」というできるだけ構造化を避けた質問方法を用いた。インタビューの対象者は5つのコミュニティから1~3名ずつで、1人あたり約30分のインタビューを行った。

長老とのインタビューはコミュニティの特徴の出た非常にユニークで考えさせられるものであった。そんなインタビュー結果の2つの例の一部を紹介しておく。

「コロン島に住むタグバヌアは、1970年代にブスアンガ島の町コロンにマーケットができるまでは、海産物は家庭で消費するか余ったものをコミュニティのメンバーと物々交換するだけだった。それ以上の物は必要無かった。海産物でお金を作るという考え方が無かった。唯一お金と交換したのは燕の巣だけだった。みんなお金が無い方が幸せだった。海で魚を取り、山でシカや野ブタを狩り、果物や木の実を集めてそれで良かった。それが今になって、お金ばかり考えるタグバヌア族のメンバーが出てきているのが悲しい。確かに子どもの教育のことを考えるとお金が必要かもしれないが、そのために部族のルールを破って違法な場所で魚を取ったり、木を切って売ったりする。それを悪いとも思わない者がでてきている。どんどん移住者が増えてきているし、これからコミュニティがどうなるか心配だ。」 カブガオの長老 A氏

「教育を受けられる若者が羨ましい。子どもの頃は、今のような教育を受けるのは難しかった。その分若者にはできるだけしっかりとした教育を受けてほしい。自分達は教育を受けられなかった分、外部から自分達の島に来て開発を行う者に対して対抗する手段を持たなかった。だからどんどん昔住んでいた場所から追いやられた。今は土地も認められ平和に暮らしているが、土地を追いやられた時は本当に苦しかった。私は外部者を排除したくないし、好意的に受け入れたいが、これから大規模な開発により多くの人々が来れば自然が豊かで静かなタラは変わってしまうかもかもしれない。若い人たちにはしっかりと教育を受けて、外部者とうまく交渉して今

の環境を守ってほしい。その上で知恵を絞ってコミュニティの発展を考えてほしい」

タラの長老 B氏

このような長老のライフヒストリーを聴いて書き残す作業を行った traditional documenter である秘書は、TKD アクションに予想以上に興味を示した。すべてのコミュニティの秘書は、先住民族権利法(IPRA)に基づいて土地や海洋資源の所有権を証明する書類作り(Certificates of Ancestral Domain Claims=CADC Application)のプロセスにおいて長老から家系に関する話や、昔から伝わる神話等の話を聞いて資料としてまとめた経験があるが、1人の長老の子ども時代から現代までの歴史を辿ることは初めてであり、最初は「そんな事を聞いて意味があるのか」と懐疑的な意見があったが、インタビューを終了して秘書に感想を聞くと「人生を聴いてみて本当のタグバナアのルーツを知った気がする」、「こうやってライフヒストリーを残すことで、いつまでも長老がこのコミュニティで生きていられる」、「最初は何でこんなことをするのか分からなかったが、長老の個人の歴史がタグバナアの歴史になることが分かった。今後他の長老にも話を聞いてみたい」というポジティブな意見が多く挙がった。

## 5-2 農業再発見フィールドワーク

農業再発見フィールドワークとして2種類のアクションを実施した。1つ目のアクションは、コロンの農地及び原生林を歩いて、人工的に栽培しているか自然に生息している穀物、野菜、野草、果物、木の実等の農業に活用できる植物を探し、長老がどう植物を利用してきたのかを若者に説明するというフィールドワークであった。当然、コロン島以外から来たコミュニティのメンバーにとって、コロン島で栽培もしくは生息している作物のすべてが自分達のコミュニティに生息しているものと一致する訳ではないが、フィールドワークを行う事でより多くの植物に気づきリストアップし易くなる事から、5つすべてのコミュニティが参加して実践した。またすべてのコミュニティに、学生が1~2名程度割り当てられた。学生はデジタルカメラを持って植物の記録を写真データとして残して、後半のワークショップ時に植物の写真を見せながらディスカッションを促進させる役割を担った。

2つ目のアクションとして、自分のコミュニティで栽培もしくは生息している植物をリストアップし、農作物としての利用状況を分析した上で、どう植物を活用して農業開発を行うのかを考えるワークショップを実施した。分析方法として、模造紙上に書かれた5つのセルボックスに記入するという単純なPLAの手法を用いた。1つ目のセル内には、①リストアップした植物名を記入し、残り4つのセルには、自分のコミュニティにおいてその植物が、②多くの家族によって広いエリアで栽培されている (Many Households/Large Area)、③少ない家族によって広いエリアで栽培されている (Few Households/Large Area)、④多くの家族によって狭いエリアで栽培されている (Many Households/Small Area)、⑤少ない家族によって狭いエリアで栽培されている (Few Households/Small Area)、のいずれかで当てはまるセルにチェックを入れるという方法を実践した。この分析を行った理由は、できるだけ多くの農業開発に活用できる植物の存在に気づく事と、チェックを入れるという比較的安易な方法で現在の農作物としての利用状況の分析が可能となるという理由からである。その後、

植物の農作物としての新たな活用方法をディスカッションして、コミュニティごとに発表してアイデアを共有した。

前半のフィールドワークでは、コロン島のカブガオの民家の敷地内に栽培されている作物を確認するためにコミュニティの家の周辺を散策した。散策により、意識的に栽培しているもの以外にも、自然に民家の敷地内に生息している植物も多く存在する事が分かった。その後、カブガオコミュニティの裏手にある森林を探索し、自然に生息していて食物及び生活に役立つ物として利用できる植物の発見を試みた。森林では非常に多くの植物を発見し、その活用方法について長老から説明を受けることができたが、参加しているタグバヌア部族の若者は既に植物に詳しい者も多く、写真を撮る学生に対してを丁寧に説明してくれた。植物についての知識は既に伝承されている様子が伺えたが、参加してくれた長老の一人は「タグバヌアの若者は、親から子へ家族の中で活用法を伝承されて理解している若者は多い。但し、すべてではない。食用としない Herbal Plant（薬草）の使い方を若者は知らない。食用以外の植物を我々がどう活用していたか伝承することも大事だ」と話していた。

フィールドワークが終了した後、5つのグループはカブガオのコミュニティホールに集合し、自分のコミュニティに存在する植物をリストアップし、現在の農作物としての利用状況を分析して活用方法を考えた。植物のリストアップについては、5つのグループともセルに書ききれないほど多くの植物をリストアップした。すべてのコミュニティに共通するものとしては、穀物としてはCassaba（キャッサバイモ）Kamote（サツマイモの一種）、Ube（紅イモ）、果物としてはココナッツやバナナそしてカラミアン諸島のお土産として有名なカシューナッツが挙げられた。しかしかなりコミュニティによって植物のリストに違いがあり、しかも農作物の活用の仕方が異なる事がワークショップより判明した。その理由を話し合った結果、島による植物の生育状況の違いと土地の活用方法の違いがあるとの意見が挙がった。コロン島のコミュニティでリストアップされた植物はほとんど農作物として活用されていない事が判明したが、それは地形が理由に関係しており、石灰岩でできたコロン島には非常に平地が少ない事から土地を各家庭に割り当てて使用しており、ほとんどの作物は家庭の敷地内で栽培されているとの事であった。一方、ブエナビスタやタラといった地域では島がなだらかで平地が多く、農業用地が非常に広いのでココナッツやバナナといった果物を農地で栽培しているとの事であった。しかしそれらもコミュニティの農業開発プランを立てて実施しているというよりは、外部者によるプランテーションで農業として行われているという状況であった。つまり殆どすべてのコミュニティにおいて、農業開発として積極的に植物を活用しているとい



フィールドワークの様子

発見した山イモの一種

ワークショップの様子

うよりは、存在するものを利用しているという事実が判明した。結果としてこのワークショップは農業としての活用を考えるには貴重な機会となったようで、「このワークショップを自分のコミュニティでも行って、若者と一緒に農業として何ができるのか考えたい」とトルダコミュニティの長老が意見を述べてくれたのが印象的であった。

### 5-3 持続可能な漁業開発再考ワークショップ

タグバナア族にとって文化的及び社会的な繋がりの強い海産物の現在と過去の消費の仕方について長老とのディスカッションを通して比較分析し、長老と若者が一緒になって将来的な持続可能な漁業開発の可能性を探るワークショップを実施した。このワークショップでは、PLAの「時間に関するツール」として4つのセルからなるマトリックスを活用した。1つ目のセルには、①海産物をリストアップし、残り3つのセルには②マーケットで売られている (Sold in Market)、③家族で消費している (Used for House Consumption)、④消費せず (No Use) をそれぞれチェックする方式を採用した。但し残り3つのセルはそれぞれ半分に割り、長老の話を基にしてマーケットができる「1970年代以前」と「現在」の消費及び商売の仕方を比較できるようにした。

海産物のリストアップについては、すべてのコミュニティが順調にリストアップを行い、セルの中に非常に小さい字で多くの海産物を記入するコミュニティが殆どであった。海産物の利用方法については、長老が1970年代以前の海産物の利用の仕方について説明して、若者が熱心に聴くという状況が多くのコミュニティのグループ内で見られた。

ワークショップの結果、町のマーケットがオープンする1970年代以前は、海産物は家庭から家庭へ売られるという状況であり、海産物もLapu-lapu (ハタの一種) やLobster (ロブスター) といった高級魚は売買される事があったが、それ以外は家庭で消費されるのみであった事実を長老が説明してくれた。しかし現在は、非常に多くの種類の魚がマーケットで売られており、外部者による消費が爆発的に増えてほとんどの海産物が売買されており、それらをタグバナア族も商売としている事実が判明した。Tagbanwa Seaweed (海ブドウの一種) も昔は簡単に海で採集できたが、現在は養殖を行ってコミュニティがマーケットで売っている事も説明された。結果として、現在は海産物の売り買いがタグバナア族の経済活動において重要な位置を占めるようになった事が確認されたが、その一方で海産物を資源としてどのように保全していくのか、その方向性については「違法な漁業者を取り締まる」以外に方法が見つからないという課題が浮き彫りになった。



伝統的な手釣りの様子

養殖している海ブドウ

ワークショップの様子



## 6. 考察 ～タグバヌア族の文化を基軸にした内発的発展の可能性～

本研究では、フィリピンの先住民族タグバヌア族コミュニティにおける内発的発展型社会開発の可能性を探る為に、タグバヌア族自身が文化を再発見しそれを強みとしてコミュニティを発展させる文化再発見型アクションリサーチを実施した。アクションリサーチとして、長老の歴史を聴いて書き残すライフヒストリーリスニング & ライティングトレーニング (LHLWT)、フィールドワークで発見された植物の活用法を分析して、将来の農業開発を考える農業再発見フィールドワーク、長老とのディスカッションを通じて現在の海産物の活用を再考し、経済発展と海洋資源保全を模索する持続可能な漁業開発再考ワークショップ、という3つを実施したが、その場におけるアクションとしてはある程度の成果を収める事ができた。PLAを活用した参加型アクションリサーチの実施により、長老が若者とコミュニケーションを取り、それを文化的財産として保全するだけでなく将来を見据えたコミュニティ発展を考える場としての機能を果たしたと推察する。

しかしこれはあくまでもきっかけに過ぎず、この3つのアクションを自分達のコミュニティで実施していけるかが本当の課題である。特に外部からの大規模な観光開発への対応がタグバヌア族コミュニティの緊急課題として挙がっている状況下で、文化を基軸にしたコミュニティの内発的発展に向けたアクションを継続するのは容易ではない。しかしその一方で、観光開発が進み外部者との接触の増加が予想される現状であるからこそ、文化の重要性を再確認する必要があると言える。先住民族は、先祖からの文化を継承することにより自らのアイデンティティを確立しコミュニティを保全しており、それが無くなるとコミュニティ自体が崩壊してしまう。外部者による先住民族の土地内での開発はもちろんの事、もたらされる外部の情報や資源の増加により、先住民族コミュニティは自らのアイデンティティ喪失の危機に晒されている。漁業開発再考ワークショップの結果から見る海産物の消費や商売のスタイルの変化を見ても、タグバヌア族コミュニティが自らの生活スタイルやアイデンティティを守ることの難しさが見て取れる。このような状況下だからこそ、タグバヌア族コミュニティの内発的発展型社会開発を推進するには、今後も外部者である研究者や学生は継続して文化を基軸としたアクションの後方支援を行う必要がある。

研究者や学生が継続的にタグバヌア族の文化を保全し、それを将来の内発的発展に繋げる支援として、まずは今回の調査内容を TKD としてまとめて冊子として参加したコミュニティに渡すことが重要である。それによりタグバヌアの秘書による自発的な TKD アクションの促進が期待できる。そして、外部者に対するタグバヌア族の文化への理解を促す為、外部者向けに TKD の冊子を配布したり、タグバヌア族の HP 立ち上げ支援を行い文化保全に対する理解を求める事も見込める。更に、タグバヌア族での TKD や文化再発見アクションがより充実して、文化的強みを活かした農業開発や漁業開発がプログラムとして実施される目処がつけば、産物のプロモーションやマーケティングに関するトレーニングを企画する事も実施可能となる。実際、3つの文化再発見型アクションリサーチの終了後、このような提案を学生からアクションリサーチの参加者にプレゼンする機会を持った結果、いくつかのコミュニティから「自分達のコミュニティにも来て学生と一緒にアクションを起こしたい」という意見が挙がった。

このように外部者である研究者や学生がタグバヌア族コミュニティを後方支援することにより文



化を基軸にしたアクションが活性化し、農業開発や漁業開発が促進されて高田モデルにある経済力の向上が期待できる状況になる可能性がある。更に経済力の向上により、タグバヌア族コミュニティの声が地方政治に届き易くなる効果も期待され、将来的にコミュニティの代議士を選出するという政治的アクションが可能になる事が期待される。このように、タグバヌア族コミュニティに対して、文化的アクションを基軸にして、経済的及び政治的アクションを内発的に発展させる図式を描いて、研究者と学生は今後も継続的に研究及び後方支援を行う予定である。

## 謝辞

本研究に関して文化再発見型アクションリサーチに参加してくれたすべてのタグバヌア部族のメンバー、通訳の Angelo Ruel Beren、そして一緒にリサーチの準備・支援を行ってくれた学生グループ IPE のメンバー、山田 佳奈、前嶋 裕美、植村 郁美、森 友希、藪 有岐子、高岡 朋子、藤原 保奈美、に心より感謝致します。

## 参考文献

- 大濱裕 (2007) 『参加型地域社会開発の理論と実践－新たな理論的枠組みの構築と実践手法の創造－』東進堂.
- 勝間靖 (2000) 「アプローチとしての PLA」プロジェクト PLA 編『続・入門社会開発』国際開発ジャーナル社, pp.218-224.
- 北島滋 (1998) 『現代社会学業書 開発と地殻変動 開発と内発的発展の相克』.
- 高田眞治 (1993) 『社会福祉混成構造論 社会福祉改革の視座と内発的発展』, 海声社, p.311.
- 武田丈 (2011) 「ソーシャルワークとアクションリサーチ [1] アクションリサーチの概要」『ソーシャルワーク研究』 Vol.37, No.1, pp.46-54, 相川書房.
- 武田丈 (2011) 「ソーシャルワークとアクションリサーチ [2] PLA による組織のエンパワメント」『ソーシャルワーク研究』 Vol.37, No.2, pp.51-60, 相川書房.
- 西川潤編 (2001) 『アジアの内発的発展』藤原書店.
- 西川潤・八木尚志・清水和美 (2007) 『社会科学を再構築する 地域平和と内発的発展』明石書店.
- G.Zaide and S.Zaide (1990) *Documentary Source of Philippine History Vol.1*, pp3-8. Navotas: Navotas Press.
- K.Zingapan and D.De Vera (1999) “Mapping the Ancestral Lands and Waters of the Calamian Tagbanwa of Coron, Northern Palawan”, Conference Paper of a Conference of Best Practice held in Davao City in 1999.
- PAFID Mindanao(2005), *Re-invigorating the Value of Traditional Knowledge ~Traditional Knowledge Documentation Workshop~ September 11-15,2005*. SRDF Training Center, Marahan, Davao City, the Phillipines.
- PAFID (2010) Terminal Report National Land Tenure Program for Indigenous People in the Philippines, MISEREOR.
- R. C.G.Capistrano (2010) “Indigenous Peoples, Their Livelihoods and Fishely Rights in Canada and Philippines: Paradoxes, Perspectives and Lessons Learned”, The United Nations-Nippon Foundation

Fellowship Programme 2009-2010.

W. Dressler (2005) “Disentangling Tagbanua Lifeways, Swidden and Conservation on Palawan Island”,  
*Human Ecology Review*, Vol.12, No.1.

### Abstract

This action research was conducted in order to re-discover the power of culture and to use it as assets for future endogenous socio-cultural development of Indigenous communities, “Tagbanwa”, in the Philippines. Three methods were used for this research; Listening and writing life histories of elders, Conducting fieldwork to re-discover the usages of wild plants, and Thinking sustainable fishing development by re-discovering old styles of sea products marketing. The results showed signs that young Tagbanwa people found the importance of writing down traditional knowledge (TK) and started to use it as the “strength” for future community development. As “outsiders”, researchers will continuously support Tagbanwa communities to promote the sustainability of culture as the basis of endogenous community development.

**Keywords:** Social development, Endogenous development, Re-discovering the power of culture,  
Life history, PLA (Participatory Learning and Action)